



経済合理性を超え、公の復権を

よしだ
吉田

たいら
平

●プロフィール

政経倶楽部副代表幹事。昭和三十四年、千葉県南房総市千倉町生まれ。東北大学工学部卒。四十八歳。リクルート入社。十二年間のサラリーマン生活を経て、三十五歳の時、父が創業したバス、タクシー会社三社（西網観光・団地交通（現・あすか交通）、平和交通）入社。平成十九年六月、代表取締役就任。第三セクターいすみ鉄道社長公募に応募し、平成二十年四月より代表取締役就任。三社の代表を退任し、プロパー社長を選任。統合会社旅客事業株式会社を設立し代表就任。尊敬する人物は父。好きな作家と本は司馬遼太郎「坂の上の雲」。好きな言葉は「志」。趣味は、スポーツ観戦。

経済合理性を超える、公の復権を

経営者こそ信念を持って、政治と正しく関わるべき

子供の頃から、働いている祖父母を見てきて「物事を一生懸命やる」のは自然なこと、当然なことと生きていました。それゆえ、私がリクルートを辞めて父の会社に入った当初も、事業を伸ばすことだけを考えていました。

当初は、経営者は政治に関わるべきではないと思っていました。父が個人として政治家と付き合っていたのは知っていましたが、それは応援がビジネスの延長線上であり、自分はそれに対しては一步引いていました。特に私の会社は路線バス会社

という公おおやけの事業なので、政治色を出してはいけないと思っていたのです。

一言で言えば、経済優先の考えでした。

しかし、政経倶楽部との出会いで、考えが変わりました。どんなに経済で頑張っても、たとえば戦争など、日本という国がおかしくなったら元も子もなくなってしまう。やはり政治は必要なのです。

経営者が経営を頑張るのは当然です。それに加えて、政治への正しい関心と関わりを持つこと、そして日本の伝統文化の良さをきちっと伝えていくことも、経営と一体となってやるべき活動だと思ふに至りました。その一環で、初めての直接的な政治活動として、田沼たか志君の後援会長も引き受けました。

これまでの私の考えでは、公共交通機関の代表者である私が一個人を応援するのは、お客様に対して公平性に欠けるのではないかと思っていました。しかし応援する大元、考えの芯がしっかりしていれば、誰にどう言われようと、信念を持って応援していけばいい。そのことを政経倶楽部で学びました。

「公共性の高い仕事をしているのに、なんで政治活動する会に入るのか？」「なぜ個人の政治家を応援するのか？」などと言われるのが嫌で、多くの経営者は政治との関わりを隠したり止めたりして、経済活動に専心しがちです。

でも、社長であっても、伝統文化に根付いた日本の歴史観の大切さのなかで、自分の信念として政治家を育てたり応援することができると証明したい。先の問いにしっかりと答えられるような人物でありたい。そう思っています。

歴史を学び、経済至上主義から脱却できた

経営者は、経営をやっていたら自然と、読む新聞は日経新聞になるなど、経済中心の物の考え方に慣らされます。私もかつてはそういう考えの下で、アウトプットばかりをしていましたが、四十歳を過ぎた頃に、自分の中のものを出し尽くして枯れてきた感を感じました。

そんなとき、日本の国柄の元について勉強したことが、変わり始めたきっかけです。日本の古代史や秀真伝※ホツマツネの勉強、あるいは倫理法人会での活動を通じて、日本の

国柄、日本人の勤勉さを、何となくですがつかめました。これによって、表面に見えてなくても大事なものが見えてきました。

※記紀よりも古い、日本最古の古文書と言われる、歴史書。

サラリーマンの頃から、歴史物、歴史小説は好きでした。三国志や論語、安岡正篤などです。経済活動を一生懸命やっていたころも、断片的には、そういうものは読んでいました。

しかし経営者となり、「ゴップ」の水がなくなったとき、日本の歴史や伝統を学ぶことで、水を補うことができました。「水がなくなる」という渴望感があつたため、歴史が体によく入ってきたのだと思います。

歴史、特に日本の伝統文化の大元である古代史には、経済や政治、地域活動などを、ひとつのものとしてつなげる力があると感じています。

近いところで言うと、たとえば千葉県の大原にいた梅屋庄吉は、中国の辛亥革命

を起こした孫文を応援していました。日活の創設者である梅屋は、孫文という人物、そして民主化への志に対して共鳴し、映画で稼いだ巨富、いまに換算すると二兆円規模の援助をしたそうです。全く国が違うにもかかわらずです。かつ、梅屋は、何も見返りを求めず、自分がやったことも一切明かさなかった。そういう日本人がいたのです。

二兆円出さなければ、孫文の活動はできなかった。絶対的にお金が必要なところに流すお金は、いいお金として流れていきます。それは、精神や心を鍛えなくてはいけない経済人にとっても、よい修行となると思っています。

戦後の経済活動では、経済至上主義によって、政治家を応援したら見返りを求めるのが前提となってしまうました。利権政治の裏に、利権経営“あり、です。しかしかつては、梅屋のような人もいた。いまこそ、そのような経営者が必要ではないでしょうか。

政官業の癒着や、マスメディアによる悪いイメージ付けで、政治支援ができなくなっています。政経倶楽部はそうではないと言いたいです。

いすみ鉄道再建は「経済合理性だけではない」

私が今年、公募で社長に就任した「いすみ鉄道」再建への挑戦は、将来路面電車をやりたいという事業欲から発している部分と、経済活動を通じての公への貢献をしたかったという、両方からです。「経営の先に日本がある」ことを政経倶楽部から教わり、志が育った気がします。

単純な経済合理性だけで考えたなら、現在の経営状態では、いすみ鉄道は廃止“という結論に導かれてもだれも反論できません。しかしそれは、現代のルールで判断しているだけ。ここを開業するとき、先駆者たちは、木を切り拓いてレールを敷き、軌道を人力で押して材木を運び、それに旅客を乗せていすみ鉄道になっていった。鉄道をひいた先人の思い、歴史の重みを考えたとき、経済合理性だけでは割り切れません。

事業としては変わらねばならないので、経済合理性をクリアできるよう頑張らねばならないですが、鉄道事業が地域全体に根ざしている価値をきちんと復活させず

に諦めてしまうのは、戦後のルールで考えているだけ。そうでない考え方で、生き残ることができるというのを、示したい。そして高校生たちに伝えたいと思っています。

いすみ鉄道は多くの高校生が利用しており、私も挨拶から始まり、さまざまな交流をしています。高校生にも「世の中は、経済合理性だけではない」ことを伝えたいと思っています。そして「鉄道存続にこだわった、大きな声で挨拶する社長がいたな」と覚えてくれたらうれしいです。

率直に言って、いすみに来たはじめての頃は、赤字路線の再建ですから、経済性だけを考えていました。しかし現地に来てやっていくうちにわかったのは、この鉄道事業は政治と同じ、地域再生事業だということです。全体の公のために、どう再建し、波及させるか、その戦略戦術がポイントです。場合によっては、全体の公のため、近隣住民の反対を押し切ってもやらねばならない決断も、あるかもしれません。政経倶楽部も、そういう勉強ができるところであってほしいと思っています。

こういう、経済合理性より大切なものがあることを、多くの経営者は発信しません。なぜなら、損になるからです。

しかし私は、むしろ影響力の大きい、一流の経済人にこそ、発信してほしい。経営者が変われば、世の中が変わり、政治も変わると思っています。

政経倶楽部に期待したいこと

政経倶楽部に期待したいことですが、単に野田代議士と寒竹代表が同級生だから始まったという、人と人との縁で応援することになった団体であってほしくないと思っと思っています。あるいは民主党だけ、自民党だけを応援するという団体であってほしくない。本当に日本を良くする政治家を育てていく団体であってほしいと思っています。

その過程として、同じままの政権では政治がよどんでしまうので、政権を交代することも戦略的には必要かと思っています。

政経倶楽部の今後ですが、私は日本の各地にも、政経倶楽部と同様、日本の国柄を大事にしながら政治を刷新しようという経営者たちがいると思っています。政経倶楽部が本物になり、発信力が高まるほど、それら団体とつながってくるでしょう。それが臨界点に達すれば、全国的な大きな動きになるはず。明治維新も、薩摩や長州で湧き起こったものが、全国に広がりました。志、“核”が本当にいいものであれば、ある段階を超えたとき、その志が北海道から九州までつながってくると思っています。